

『四世同堂』の中の“是……的”構文 助詞・助動詞・副詞を含む例文を中心に

郭 穎 俠

要 旨

四世同堂 是老舍的代表作之一，成书于 19 世纪 40 年代。书中大量使用了北京的口语。其中，“是……的”结构句子的使用明显多于其他作品。本文是在对 四世同堂 全文进行调查的基础上，抽出所有“是……的”结构的例句后加以考察分析的。通过对助词、助动词、副词与“是……的”结构的共用情况的考察，我们发现实际上“的”的功能是始终如一的。即：“的”表示对过去事件的陈述。只是因为它表过去的功能不是强义，所以在一定的条件下会被掩盖。但此时它表陈述的功能相应变强，没有它的存在句子会失去完整性。

キーワード……共起 過去の時制 完結性

0 はじめに

“我是昨天去的。”“李老师是从上的学校转来的。”のような“是……的”構文は、1980 年代以来注目を浴び、中国語学者と外国人のための中国語教育者による研究は数多く出ている(宋玉柱(1981)、楊石泉(1997)、李訥他(1998)など)。また、日本語と中国語の対照研究の中でも“是……的”構文がたびたび取り上げられている(杉村(1982)、王亜新(1997)など)。しかし、ひとくちに“是……的”構文といっても、その中にいろいろと性質の違うものがある。今までの研究をみても、分析しやすいために、一部の均質のものしか考察しないのが一般的である。ごくまれな例として、劉(1983)は考察範囲を広く扱い、“是……的”構文を二種に分け、考察をおこなったのであるが、それも分ける基準が決して明確で有効なものとはいえず、またその二種の間位置するようなものも少なくない。こういう状況の中で、広い範囲で“是……的”構文を考察し、一つの研究法で最後まで貫くような研究が必要になってくる。つまり、同じ“是……的”構文であるから、主観的に違う種類に分けたり、考察から排除したりするのはなく、積極的に同じものとして一つの視点から網羅的に考察するということがある。これが本稿の目的である。

考察にあたって使用する文例に関しては、今までの研究で筆者が文例を作るか、いくつかの小説や他人の論文から例を取ってくるかが普通である。しかし、文体や時代差、そして個人差

『四世同堂』の中の“是……的”構文（郭）

があることを考えると、それは必ずしもいい方法とはいえない。そこで、本稿では統一的な考察を可能とするために、一つの小説からすべての例文を抽出することにする。そこで撰んだのは、「人民作家」と称賛された老舎が書いた百万字の『四世同堂』¹⁾である。『四世同堂』は北京市民の生活を描写する代表作で、1940年代の北京の口語で書かれたものなので、その時の言語事情を調べるためのいい素材になっている。中では“是……的”構文²⁾の文がたくさん使われている。他の作家の作品や老舎自身のほかの作品と比べると“是……的”構文の使用数が断然に多く、しかもいろいろな形と意味で現れている。この『四世同堂』を調査することによって、“是……的”構文の口語における使用状況が大体判ると思われる³⁾。

本稿では『四世同堂』全文を対象にすべての“是……的”構文の文を分析したうえで、今までの“是……的”構文の研究で問題になっているものといままであまり論じられていないが問題が存在するものを取り上げる。

0・1 本稿で扱う“是……的”構文の範囲

- 1 “是……的”の間に動詞述語が存在する文。（形容詞、名詞しかないものを排除する。四字熟語や決り文句は範囲内にする）
- 2 前後の文脈で述語になる動詞が省略されることが明らかな場合も含む。
- 3 否定表現は全部肯定表現の中で扱う。つまり、“不 A”を“A”の中で扱う。統計時には同一視する。
- 4 “的”の後に名詞が省略されたと考えられるものを除外する。

0・2 本稿の仮説：

“是……的”構文は過去において発生したことが現在に関係しているという立場から「事情はこうである」と説明する。“的”は過去の時制をあらわす助詞であるが、強意のものではなく、過去でない時間名詞、副詞、それから助動詞が用いられる場合、過去の意味が消去される。その時、単なる文を終結させる働きがつよくなり、この場合「是」にとって“的”の呼応が欠かせないものである⁴⁾。

0・3 本稿の構成：

まず、助詞、主に時態助詞や語気助詞が“是……的”構文と共起する時の位置関係、そして、“是……的”構文の意味機能を吟味する。次に助動詞の出現状況から“的”の機能の変換を考察する。そして、“是……的”の間に現れる述語動詞の中で頻度の高いものについて考察す

る。最後に“是……的”のバラエティを考察する。

1 “是……的”構文と助詞との共起の問題

“是……的”構文の中の“的”は助詞であることは認められているが、時態助詞なのか、それとも語気助詞⁹⁾なのかは各説の分かれるところである。助詞が種類によって文中に現れる位置が決まっているので、主な時態助詞や語気助詞と共起する時の位置を考察すれば、“的”の所属が分かってくるはずである。

1・1 時態助詞と共起の問題

“是……的”構文は已然の意味をもつと言われているが、時態助詞“着”“了”“過”と共起することが問題になっている。袁毓林(2003:11-12)では、“着”“了”“過”と共起することを已然義を現わさない理由としている。しかし、“着”“了”“過”のない文において、1.“的”を除去すれば過去のことでなくなる、2.“着”“過”と“了”が共起する。という二つのことを考えると、“的”の已然義が否定できないと思われる。例文で“着”“了”“過”と“的”の共起の事情を確認しよう。

“是…过…的”

他被拉到审判官的公案前，才又睁开眼；一眼就看见三个发着光的绿脸——它们都是化装过的。(25節)

他更佩服了瑞宣，心中说：人家是下过幼工的！(36節)

“这所房子是我——等我想一想啊——前六年翻修过的，砖瓦木料全骨力硬棒！(71節)

他觉得，不论怎样，他也应当同情那位老太婆——她不完全是日本人，她是看过全世界的，而日本，在她心中，不过是世界的一小部分；因此，她的心是超过了种族，国籍，与宗教等等的成见的。(79節)

反之，瑞全身上的灰土才是曾经在沙场上飞扬过的，瑞全所知道的才是国家大事。(84節)

“过”はアスペクト助詞で、経験を表す。これらの例文においては“的”は省略できない。「是」と前後呼応をなしている。文の完結性のために必須である。“的”が“過”と共起する場合、“的”の已然義が“過”の経験を表す働きに覆われるため、それが顕現しなくなっている。

『四世同堂』の中の“是……的”構文（郭）

是…了（…）的

这次，除了商会中几个重要人物作些私人的活动，商会本身并没有什么表示，而铺户的开市是受了警察的通告的。（8 節）

背着一口袋新小米，他由家里一口气走到祁家。除了脸上和身上落了一层细黄土，简直看不出来他是刚刚负着几十斤粮走了好几里路的。（15 節）

至于蓝东阳呀，我看他还不错吗！怎么？你是为了我们才和他闹翻了的？真对不起！（29 節）

地是冻硬了的，他们的脚又用力的踩，所以呱哒呱哒的分外的响。（51 節）

只有这样，他想，才足以对得起死去的父亲，而亲友们也必钦佩祁家——虽然人是投河死了的，事情可办得没有一点缺陷啊！（60 節）

可是他更糊涂了：晓荷在这儿干什么呢？看样子，晓荷大概也是被人家拖了来的；为什么呢？他想：假若晓荷和他自己同样的被人家拖了来，晓荷就不至于陷害他；不过，晓荷总是晓荷，有晓荷的地方必不会有好事。（78 節）

、 は動詞に目的語が付いているが、“了”が目的語の前に着ている。つまりこの“了”は動作の実現を表すアスペクト助詞である。 から は目的語を持たない自動詞であるが、“了”が“的”の前に位置しているので、やはり語気助詞ではないと思われる。 の場合は“着”に置き換えることができるので、龔千炎（1995:73-74）では「動作行為が発生してからある状態を保つ」という結果残存の意味を持つとして、“着”とはほとんど意味が変わらないが変化過程の中の存在や実現の状態を表すと述べている。ここはもう少し詳しい検討が必要だと思われる。なお、上の例文はすべて過去の時制である。“了”と“的”のいずれか一方を削除しても意味は変わらない。つまり、同じ働きをしていると考えられる。

可是，他把话收住了——他知道甘心作奴隶的人是不会因为一两句不悦耳的话而释放了他的，何苦多白费唇舌呢。（40 節）

“会”は可能性や意志を表す助動詞で、上の例文は過去を表さない。“了”が表す「完了」の意が過去の時制でも将来の時制のもとでも変わらない。“了”は省略しても意味が変わらない。むしろそのほうが簡潔で自然である。逆に“的”をとったら、文がまだ終わっていない感じがする。

例文を見てわかるように、“過”や“了”はアスペクトを表す助詞で、動作がどの段階についてたかを表わすが、“的”は構文中の事態全体が過去であることを示す。そのため共起できるのである。“会”・“肯”等の助動詞が将来と結びつくものがある時、“的”は過去を表さない。つま

り、“的”の已然意は弱いため強い標識が現れれば、抑えられるのである。

是……着的

瑞丰赶紧走回原位，觉的太太有点不懂事，可是不便再说什么；他晓得夫妻间的和睦是仗着丈夫能含着笑承认太太的不懂事而维持着的。(16節)

“我现在是教务主任，不久就是校长，你的地位是在我手里攥着的！我一撒手，你就掉在地上！我告诉你，除非你赔偿上八十块钱，我一定免你的职！”(28節)

“公园是给享受太平的人们预备着的，你没有资格去！”(13節)

在他的端午节那组卡片中，五毒饼正和中秋的月饼与年节的年糕一样，是用红字写着着的。(39節)

天已快黑了，他上哪儿去呢？平日，他总以为北平的一切都是给他预备的：洋车是给他代步的，只要他一点头，马上有两条腿来替他奔跑；街灯是给他照亮儿的，好使他的缎子鞋不至于踩着脏东西；铺户是为他开着的，只要他一摸钱袋，那些作生意的便象一群狗似的来伺候他。(77節)

は動作行為の持続を表すが、は動作行為が終わった後の状態の持続、つまり結果残存を表す。全体の例文からみると、後者のほうが例が多い。特に“预备着的”だけで6例ある。のような“预备着的”の例とにも出ているような“预备的”(全部2例ある)をあわせて見れば、作者は同じように使っていることが分かる。つまり、“着”の有無にかかわらず文の意味には変わりがないのである。

“着”“了”“過”のなかで、“了”が“的”に一番近いのである。

1.2 語気助詞

是……的了

語気助詞といわれる“了”は文末に位置する。“是……的”構文がこの種の“了”と共に起する場合、まず“是……的”で文をいったん完結させ、その上に“了”を加える形になる。

他所结交的名士们，自然用不着说，是会这些把戏的了；就连在天津作寓公的，有钱而失去势力的军阀与官僚，也往往会那么一招两招的。(3節)

她的牌起得非常的整齐，连庄是绝对可靠的了。(16節)

没有人招呼他，他自己也不知道该到何处去，北平的一切已不是为他预备着的了！(77節)

『四世同堂』の中の“是……的”構文（郭）

日本人是一时半会儿决不能离开北平的了！（32節）

この場合の“的”は省略されても通じるが、意味に少し変化が生じるように思われる。また、と においては“了”はこれから先の変化を表わすと理解できるが、と はそうはいかないが、感嘆の語気を表わす。

是……的呀

“孙七爷，你白活这么大的岁数呀！他大节下的，一个铜板拿不回来，你还夸奖他哪？人心都是肉作的，你的是什么作的呀，我问问你！”（16節）

第三，夏天的饭食也许因天热而简单一些，可是厨房里的王瓜是可以在不得已的时候偷取一根的呀。（41節）

死的本身就该诅咒，何况死的是小崔，而小崔又是被砍了头的呀！她重新哭起来。（49節）

其他

等到她们死去活来的有好几次了，他抹了一把鼻涕，高声的说：“死人是哭不活的哟！都住声！我们得办事！不能教死人臭在家里！”（17節）

南京怎样呢？上海丢掉，南京还能守吗？还继续作战吗？恐怕要和吧？怎么和呢？华北恐怕是要割让的吧？那样，北平将永远是日本人的了！（31節）

她必须用大赤包的办法打败了大赤包；大赤包不是无论在什么时节都打扮得花狸狐哨的吗？好，她也得这么办！（69節）

这还是富善先生在三十年前印的呢，红纸已然有点发黄。（80節）

この場合の“的”は省略しにくい。つまり、“的”で文をいったん一つの陳述として終結させ、その上に疑問や感嘆のような語気助詞を加えるのである。

“是……的”構文と共起できる主な助詞の文例数を表1にまとめている。

表1 助詞の文例数（筆者作成）

助詞	着	了	过	呀	其他
構文中	17	22	9		
構文外		6		5	6

“是……的”構文が助詞と共起する場合、時態助詞は“的”の前に現れ、語気助詞は“的”

の後に現れることが例文ではっきり示している。つまり、この助詞“的”は時態助詞と語気助詞の間の性格を持っていることが分かる。純粋な時態助詞に比べれば、“的”が語気助詞の性格ももっているため、その後位置する。そして、純粋な語気助詞に比べれば、“的”が時態助詞の性格ももっているため、その前にくる。

2 助動詞

“是……的”構文の中に“会”“能”“要”などの助動詞（能願動詞ともいう）がよく現れる。これらは単独で述語になれるが、文法的特徴は非動作動詞に近い一類である。そして“着”“了”“過”のような時態助詞と共起しないことが一大特徴である。つまり、個別の語（会など）の特別な場合を除いて、基本的に過去のことを現わすことができない。この場合、“是……的”構文の“的”がもっている過去の意味が消されることになる。つまり、助動詞が現わしている時制が“是……的”構文内部の時制である。“是……的”の間に助動詞しかない例もある。

2・1 会

她一答一和的跟老人说着话儿，从眼泪里追忆过去的苦难，而希望这次的危险是会极快便过去的。（3 節）

他是专会打死老虎的。（23 節）

假若他们一声不出的，若无其事的，接受胜利，北平人是会假装不知道而减少对征服者的反感的。（23 節）

有这样的英雄的民族是不会被征服的！（27 節）

毒刑是会把人打老实了的，他不愿看老人就这么老老实实的认了输。报复吧？一个人有什么力量呢！（27 節）

“会”は可能性や能力を表わし、通常将来の事を指す。また、“是”と“会”の間に“不”のほかには“絶対不”や“絶不”が現れる。

可是，钱老人的嘴很严。他使瑞宣看出来，他是绝对不会把被捕以后的事说给第二个人的。（27 節）

他知道，只要士气壮，民气盛，国家是绝对不会被一两个汉奸卖净了的。（56 節）

2・2 能

话虽是对小崔说的,她可是并没看见他;她的话是不能存在心中的,假若遇不到对象,她会象上了弦的留声机似的,不管有人听没有,独自说出来。(16 節)

是的,他必须去,他须象个木楔似的硬楔进冠家去,教他们没法不承认他们是他们的好朋友。况且,太太的命令是不能不遵从的呢。(19 節)

在一个中国人的心里,父亲是不能把女儿当作一根草棍儿似的随便扔出去的。(44 節)

日本人是一时半会儿决不能离开北平的了! (32 節)

第二,他再逐一的捡起来,抖一抖,抖去沙土,也顺手儿看看,哪一块上的污垢是非过水不能去掉的。(58 節)

“是不能…的”の形の例が圧倒的に多い。そして、とのように“是”と“不能”の間に副詞や文を挿入することができる。また、“不是…能…的”の形の例もある。“是不能…的”の場合は述語全体ではなく、“能”を否定することになるが、“不是…能…的”の場合は“能”の前の部分だけを否定することになる。劉(1983:492)では“是……的”構文を二種類にわけ、その種類によって否定形の“不”の位置が違っていると述べている。しかし、例文の考察で分かるように意味によって“不”の位置が違うだけである。

可是,在感情上他还是希望有那么一点壮烈的表现,不管上算与吃亏。壮烈不是算盘上能打出来的。(26 節)

战斗,你知道,不是一个人能搞成功的。(50 節)

及至户口调查过了,大家才知道六十岁以上的,六岁以下的,没有领粮的资格!这不是任何中国人所能受的!(74 節)

補語を使って可能性や能力を現わす例文は次のようなものがある。“不起”、“不出来”、“没法子”、“不了”など。これらも否定の形で出ている。

野求抬了抬头,想建议他的全家搬来,可是紧跟着便又低下头去,不敢把心意说出来;他晓得自己的经济能力是担负不起两个人的一日三餐的;况且姐夫的调养还特别要多花钱呢!(21 節)

学生们的眼睛开始活动,似乎都希望他说点与国事有关的消息或意见。他也很想说,好使他们或者能够得着一点点安慰。可是,他说不出来。真正的苦痛是说不出来的!

(22 節)

据我看,因家庭之累或别的原因,逃不出北平,可是也不蓄意给日本人作事的,不能

算作汉奸。象北平这么多的人口，是没法子一下儿都逃空的。(30節)

拣着一堆马粪，他就回头看一看他的地，而后告诉自己：都是谣言，地是丢不了的！金子银子都容易丢了，只有这黑黄的地土永远丢不了！(35節)

また、“不能 + 是……的”の形のものもある。

“不能！”他心里说：“不能是日本人干的！从日本人那方面说，他们给他的太太带来官职，地位，金钱，势力。(67節)

否定の意味の例文が圧倒的に多いことは“是……的”構文の何らかの特性を示しているように思われる。つまり、焦点の問題である。否定の文も“是……的”構文の文も普通の文と違って焦点を標記しているのである。

2・3 要

他知道，家道暴发，远不如慢慢的平稳的发展；暴发是要伤元气的！作官虽然不必就是暴发，可是“官”，在老人心里，总好象有什么可怕的地方！(30節)

可是，他也知道，在它们成为钻石之前，他是要感到孤寂与苦闷的。(41節)

李空山每次来到，除了和大赤包算账，(大赤包由包庇暗娼来的钱，是要和李空山三七分账的，)便一直到高第屋里去，不管高第穿着长衣没穿，还是正在床上睡觉。(43節)

大赤包觉得有多少只手在打她的嘴巴！不错，女儿迟早是要出嫁的，但是她的女儿就须按照她的心意去嫁人。(44節)

这使她又来到世界上，承认了自己是要继续活下去的。(58節)

助動詞“要”は可能性、必要性、意志などの意味を現わすので、上の例はすべて已然義を持たない。

2・4 可以

假若老二是因为不放心老三的安全而责备老大，瑞宣一定不会生气，因为人的胆量是不会一样大的。胆量小而情感厚是可以原谅的。(13節)

②祁老人把瑞宣叫了去。瑞宣明知道说及死亡必定招老人心中不快，可是他没法作善意的欺哄，因为钱家的哭声是随时可以送到老人的耳中的。(17節)

在天津，在敌人占据了各学校之后，他们本无意烧掉各图书馆的书籍，不是爱惜它们，

『四世同堂』の中の“是……的”構文（郭）

而是以为书籍也多少可以换取几个钱的。（23 節）

助動詞“可以”は許可や可能性を表わすので、上の例はすべて已然義を持たない。

2・5 肯

以祁老人的饱经患难，他的小眼睛里是不肯轻易落出泪来的。（14 節）

他总以为改朝换代的时候是最容易活动的时候，因为其中有个肯降与不肯降的问题——他是决定肯投降的。（26 節）

赶到科学的医术由西方传来，我们又知道了以阿司匹灵代替万应锭，以兜安氏药膏代替冻疮膏子药；中国人是喜欢保留古方而又不肯轻易拒绝新玩艺儿的。（37 節）

助動詞“肯”は意志を表わすので、上の例はすべて已然義を持たない。

2・6 得

走到钱家门外，他不由的想起钱默吟先生，而立刻觉得那个“十分”是减不得的。同时，他觉得手中拿着两个兔儿爷是非常不合适的；钱先生怎样了，是已经被日本人打死，还是熬着苦刑在狱里受罪？（14 節）

她让他们都看明白招弟是动不得的——她心里说：招弟起码得嫁个日本司令官！（32 節）

在生意经里，“隔行利”是贪不得的。（53 節）

ここの助動詞“得”は単音節の動詞の後につき、可能や許可を表わし、受身の意味をもつ。上の例はすべて已然義を持たない。

表 2 助動詞の文例数（筆者作成）

助動詞	会	能	要	可以	肯	得
文例数	47	18	13	24	6	4

上の例文から分かるように“是……的”構文の中の助動詞は非過去を表わすために、構文全体が過去の時制でなくなる。“是……的”構文の“的”は前に出ている“是”と呼応して文を終わらせる。“是……的”をとっても文の意味（命題の部分）は変わらない。

また、李訥他（1998:100）は助動詞が殆どの場合“是”と共に起しないとしているが、本稿の

考察でわかるように、それは言語事実を正しく反映していない。

3 副詞

副詞と“是”との共起は“是……的”構文以前に問題になっている⁶⁾。共起できるかどうかは副詞と“是”両方の性質にかかわる。ここでは例の多いものをいくつか考察したい。

3・1 語気副詞

必定

天佑知道长子的一举一动都有分寸，也知道一个人在社会上作事是必定有进有退的，而且进退决定于一眨眼的工夫，不愿意别人追问为了什么原因。(8 節)

他以为一切洋字都是英文，而丁约翰是必定精通英文的。(36 節)

他知道，一个英国人，即使是一个喜爱东方的英国人，象富善先生，必定是重实际的。(41 節)

必

她嘱咐桐芳听着门，因为她回来的时候是不必爬墙的。(11 節)

她一眼看到还没有到手的洋钱，而洋钱是可以使她不必再揪心缸里的米与孩子脚上的鞋袜的。(39 節)

他以为凭牛教授的资格与学识，还不至于为了个局长的地位就肯附逆；牛教授的被刺，他想，必是日本人干的。(52 節)

必须

牌没法打下去了。冠先生与冠太太都想纳住气，不在客人面前发作。在他俩的心中，这点修养与控制是必须表现给客人们看的，以便维持自己的身分。(16 節)

山木与别的日本人的疯狂，他刚才想过，是必须教中国人给打明白的。(38 節)

毒手是必须下的，可要看放在哪里。(85 節)

须

她觉得这条路子比晓荷的有更多的把握，因为她既自信自己的本领，又知道运动官职地位是须走内线的。(7 節)

『四世同堂』の中の“是……的”構文(郭)

不，这未免有点对不起桐芳！不过，人是须随着官运而发展自己的。(66節)

他不反对发财。他可更重规矩。他的财须是规规矩矩发的。(31節)

“是+必……的”には必定、(不)必、必須、須などのバラエティがあるが、すべてこれからのことについて述べている。また、構文の外に現れる例もある。

像

他们的脸都是白的，没有任何表情，像是石头刻的。(22節)

贵族的衰落多半是像雨后的鲜蘑的，今天还是庞大的东西，明天就变成一些粉末，随风而逝！(24節)

一个不小的院子，一排北房有十多间，象兵营，一排南房有七八间，像是马棚改造的。院中是三合土砸的地，很平，象个小操场。(33節)

3・2 時間副詞

本・本来

在当初，他置买这所房子的时候，因为人口少，本来是有邻居的。(63節)

一号的小孩子本是去向特使行参见礼的，象两个落在水里的老鼠似的跑回家来。(47節)

至于樱桃和桑葚，本都是由北山与城外来的，可是从西山到北山还都有没一定阵地的战事，没人敢运果子进城。(35節)

永远

祖父可以用思念孙子当作一种消遣，母亲的想儿子可是永远动真心的。(26節)

大赤包的主意，除了她自己愿意马上改变，永远是不易撤销的。(19節)

婚丧事的预算永远是靠不住的。(63節)

向来

小崔，一个洋车夫，对巡警是向来没有什么好感的。(7節)

她晓得丈夫是向来不迁怒到儿女身上去的。(26節)

“我们玩牌向来是打对折给钱的；那天一忙，就实价实收了你的；真对不起！”(29節)

否定の形が多く使われている。

3・4 範圍副詞

都

他象一株老树，在院里生满了枝条，每一条枝上的花叶都是由他生出去的！在胡同里，他也感到得意。（2 節）

“请你原谅我的发脾气，老二！但是，你也应当知道，好话都是不大受听的！好，你去吧！”（13 節）

由一〇五号到一〇九号立在最后，大概都是新进来的，神情上都显出特别的不自然与不安。（70 節）

副詞が“是……的”構文の外に位置する場合、構文内部の時制に關与しない。しかし、構文内部に入って“是”の後に位置する場合、“的”に優先して構文の時制を決めるのである。その構文内外によく出て来る副詞の出現頻度は表 3 を参照されたい。

表 3 主な副詞の出現頻度（筆者作成）

副詞	必(定)	(必)須	像	本(来)	永远	向来	都
構文中	7	3	1		3	7	
構文外	2	1	4	4	3	1	22

4 述語動詞

4・1 有

是的，今天在北平投一两个炸弹也不过象往大海中扔一块小砖儿；可是，历史是有节奏的，到时候就必须有很响的一声鼓或一声锣。（25 節）

在当初，他置买这所房子的时候，因为人口少，本来是有邻居的。（63 節）

他们的侵略是没有止境的，他们征服了全世界，大概还要征服火星！（3 節）

動詞“有”は「有する」、「存在する」など靜態的な意味で使う場合にしか“是……的”構文の中に位置しない。ここの“没有”も否定助動詞として使う場合は除外され、“有”の反対語として使う場合だけである。

4・2 喜欢

『四世同堂』の中の“是……的”構文(郭)

从这些诗人骚客的口中，冠晓荷学会了一套：“日本人是喜欢作诗的，而且都作中国旧诗！要不怎么说白话诗没价值呢！”（9節）

有一回，太爷爷居然为这个事落了眼泪。小顺儿忙着躲开，大人们的眼泪是不喜欢叫小孩子看见的。妈妈的泪不是每每落在厨房的炉子上么？（35節）

北平人多数是喜欢热闹的，而这里太幽静。（50節）

4・3 属于

虽然他手下也有特务，可是他想招弟恐怕是直属于军部的；一个军部的特务是可以随便欺侮一个文官的。（76節）

战争是杀人的事，而他的本事与学识是属于太平年月的。（86節）

她觉得这个英雄应当是属于她的。（11節）

4・4 值得

瑞宣本来就没心去计较金三爷曾经冷淡过他；在看见金三爷怎样收拾了冠晓荷以后，他觉得这个老人是也还值得钦佩的。（21節）

他们听到了革命的枪声便全把头藏在被窝里，可是他们的生活艺术是值得写出多少部有价值与趣味的书来的。（24節）

他明知道这种消极的抵制，并无补于事，可是他到底还觉得有这么一口硬气是值得自傲的。（76節）

4・5 四字熟語

四字熟語やことわざのような決り文句は述語になる時、よく“是……的”構文を使う。形容詞的なものは別としても⁷⁾、動詞が四字熟語のなかに位置する或いは全体的に動詞性を持っているものも少なくない。この場合、一つの真理や仕来りとして過去でも現在でもそして将来も変わらない意味をもっている。“是……的”構文は時制を標記することなく、陳述性を加える働きをもっている。

不错，在这年月，人人都该少管别人的闲事；象猫管不着狗的事那样。可是，见死不救，究竟是与心不安的。（15節）

常二爷正在地里忙着，可是救命的事是义不容辞的。（35節）

可是，他们越是这样好离好散的，他心中才越难过。（38節）

“以前，我说过：艺术是没有国界的，和……那些不着边际的话。那太浮浅了！人是活到老，学到老的！现在，我总算抓到了问题的根儿，总算有了进步！有了进步！”（23 節）

她的喜怒哀乐都是大起大落，整出整入的；只有这样说恼便恼，说笑就笑，才能表现出她的魄力与气派，而使她象西太后。（6 節）

“呕，我不应当催促你！真正的中国人是要慢条斯礼的！你慢慢去想一想吧？”（34 節）

表 4 主な述語動詞文例数（筆者作成）

動詞	有	喜欢	属于	值得	四字熟語等
語例数	45	15	6	5	21

5 是……不是

“是……的”構文は“是……的”以外、対比的に使うものや肯否疑問の形で使うものもよくある。

5・1 不是……的、而是……的

他不能说，他知道妞子是在祖母和太爷爷的教养下由没有牙长到了满嘴都是顶可爱的小牙的年纪；她的油滑不是天生的，而是好几代的聪明教给她的！这好几代的聪明宁可失去他们的北平，也不教他们的小儿女受一巴掌的苦痛！（27 節）

金三爷的发光红脑门上冒着汗，不是走出来的，而是因为随着女儿一步一步的蹭，急出来的。（34 節）

楞着楞着，她们都落了泪，她们的委屈都没法说，因为那些委屈都不是由她们自己的行为招来的，而是由一种莫名其妙的，无可抵御的什么，硬压在她们背上的。（50 節）

5・2 是……的、是……的

东阳的钱，瑞丰可以猜想得到，一部分是由新民会得来的，一部分也必是由爱钱如命才积省下来的。（28 節）

他看见了中日合办的饭馆，里面的装备都是中日合璧的：高桌高凳是给中国人预备的，另有一些矮桌是给日本人用的。（76 節）

『四世同堂』の中の“是……的”構文（郭）

今天，他才明白日本人是能把英国府的威风消尽了，日本人是能打倒西洋人的上帝的。（86 節）

対比的に使うことによって、焦点をはっきりさせる効果がある。

5・3 片方だけ“的”が現れる

祖父的过度的谦卑是从生活经验中得来，而不是自己创制的。（28 節）

这些细货有的是用棉纸包着斜立在玻璃橱里，有的是折好平放在矮玻璃柜子里的。（59 節）

前の方の“的”が省略されている形である。文を簡潔なものにするために、複文の全文（従属節）に出ている“的”はよく省略される。

5・4 是不是……的

“姐夫！你是不是也来看那个娃娃的？”默吟走得更慢了，低着头，用手背抹去脸上的泪。（45 節）

瑞宣不晓得是不是富善先生营救他出来的，可是很愿马上去看他；即使富善先生没有出力，他也愿意先教老先生知道他已经出来，好放心。（48 節）

うえの文を答える時、“是也来看那个娃娃的”のように“是”から“的”までの部分全部繰り返さなければならない。簡略に言う時は“是”で答える。述語動詞だけでは答えられない。このことから分かるのは、“是……的”構文の中の階層として“……的”の部分が最初のまとまりをなして、そのうえから“是”が加えられたものだということである。

6 全体の調査結果

『四世同堂』小説全体を調査した結果、本稿の考察範囲（0・1 を参照）に当てはまる例文数は 922。うち“是”が省略されたと思われる（文の意味を変えずに復元できる）ものを含む。そのため、“（是）……的”と表記し、“是”が省略されたと思われるものを“……的”と表記する。また、“……的”のなかに“够”が述語になる例文が際立っているので、それも統計しておいた。具体的に表 5 にまとめてある。

表 5 “是……的”構文の例文数の内訳（筆者作成）

形式	文例数	%
(是)……的	922	100%
是……的	725	78.6%
……的	197	21.4%
够……的	34	3.7%

おわりに

“是……的”構文あるいは“的”を検討する時、“的”が文を完全な文にするための働きをもつことを忘れてはいけない。“的”の過去の時制を表す働きが弱いもので、助動詞の付加や述語の種類など幾つかの条件によってそれが消されることになる。しかし、そのときもう一つの働き - - 陳述の語気（説明を加える） - - が主な働きになる。

ここで一つ注目してほしいのは肯定形式の“是……的”構文はすべて“是”を仲介に判断文になおせることである。伝達効果に違いがあるが、文の基本的な意味としては変りはない。

A 是 B 的。 B 的是 A。

本稿の最初に出た文を変えてみると、こうなる。

他们都是化装过的 化装过的是它们
人家是下过幼工的 下过幼工的是人家

これは“的”はもともと後の名詞が省略されたもの（形式名詞とも考えられる）からきたことを示唆しているのではないと思われる。しかし、

蓝东阳是可以认真的去卖友求荣的

可以认真的去卖友求荣的是蓝东阳（可能性 - - 非過去）

认真的去卖友求荣的是蓝东阳（現実 - - 過去）

日本人是能打倒西洋人的上帝的

能打倒西洋人的上帝的是日本人（可能性 - - 非過去）

打倒西洋人的上帝的是日本人（現実 - - 過去）

“能”や“可以”のような時制を決められる成分がないかぎり、“的”が表わす過去の時制が顕現する。つまり、“的”は格助詞から来たものであるにしても、この段階では格助詞のそれとかけ離れ、文中位置や構文機能などがまったく違うものになっているのである。

<注>

1) 本文はインターネット（<http://www.51xs.com/xdwx/1/laoshe/ssst/001.htm>）の原文によって調査を行ったものである。例文として提示したものは老舍（1999）で照合済みである。また、88～100節までの13

『四世同堂』の中の“是……的”構文（郭）

節は原稿紛失のため、英語版の翻訳を使用しているため、その部分は考察から取り除く。

- 2) “是……的”を一つの構文として認めない説（楊 1997 など）もあるが、本稿では“是”が基本的に名詞や形容詞以外の場合“的”の呼応を要求しているため、構文でなくても緊密な関係にあるという意味で一般的なこの呼び方に従う。また、構文という概念の規定にもよると思われる。
- 3) 『四世同堂』に出ている言葉はいまでも普通に使われていることから見ると、現在の言語事情とは大差がないと思われる。文法的な要素の変化が語彙より遅いので、これもそれほど変わっていないと考えられる。しかし、使うことは使うが時代によって使用頻度に変化があることは予想できるので、現在の事情についてはまた別に考察することにする。本稿では、あくまでも『四世同堂』に即して考察する。
- 4) 「是」はここでは主題を提示する助詞の性質をもっているもので、「的」の呼応を要求する。この“是”に関しては別に考察する。
- 5) 張誼生（2000）のように語気詞として単独の品詞目を立てる場合もある。
- 6) 参考文献の 5 を参照されたい。
- 7) 刑福義（2003）では“是……的”構文のなかに入ることを形容詞の特徴としている。

< 参考文献 >

1. 宋玉柱（1981）「关于时间助词“的”和“来着”」『中国語文』81・4
2. 杉村博文（1982）「“是……的”——中国語の「のだ」の文——」『講座日本語学 12 外国語との対照』明治書院
3. 劉月華・潘文娛・故韡（1983）『实用現代漢語語法』外語教学与研究出版社
4. 古川裕（1989）「副詞修飾“是”字情況考察」『中國語文』89・1
5. 龔千炎（1995）『漢語知識叢書 漢語の時相 時制 時態』商務印書館
6. 楊石泉（1997）「“是……的”句質疑」『中國語文』97・5
7. 王亜新（1997）「日本語の「のだ」と中国語の「是……（的）」について」『東洋大学紀要・教養課程 篇』36
8. 李讷・安珊笛・張伯江（1998）「从話語角度論証語氣詞“的 de”」『中國語文』98・2
9. 老舍（1999）『老舍全集』人民文学出版社
10. 張誼生（2000）『現代漢語虚詞』華東師範大学出版社
11. 袁毓林（2003）「从焦点理論看句尾“的”的句法语义功能」『中国語文』03・1
12. 刑福義（2003）『詞類辨難』商務印刷館

主指導教員（船城俊太郎教授） 副指導教員（大石 強教授・中西啓子教授）